＜第１号＞
仙台市青葉区堤通
雨宮町１番１号
(〒981)
東北大学農学部
国際交流委員会
No.1 Feb. 1997

緑のかけはし

International Communication for Division of Agriculture (ICDA)

農学部留学生ニュースレターの発行に寄せて

東北大学農学部長　佐々木　康　之

このたび，農学部留学生の皆さんのために，新しく，「農学部留学生ニュースレター」を発行することになりました。まことに喜ばしいことです。

本年は，農学部にとっていろいろな点でうれしいできごとが続きます。一つは，本年が農学部創立50周年にあたることです。50年という歴史は必ずしも長くありませんが，この間に，わが農学部は，東北地方の荒廃した農村の食糧生産を増大させるのに大いに貢献してきました。農学部の発展は，東北農業の復興と歩みをともにしてきたと言っても過言ではありません。更に，学部あるいは大学院を修了した多くの人材は，東北ばかりでなく，国外での農業や農学の発展に寄与してきました。もちろんその中には，多数の優秀な留学生も含まれております。

最近，来世紀における地球規模での食糧危機の到来が叫ばれています。今後とも，環境を守りつつ，増え続ける地球人口に万遍なく食糧を供給し続けることは，至難の業でありますが，このことを成しとげるには，教育や研究のレベルを高めて，食糧生産の技術開発に従事する人達の資質を向上する以外に道はありません。大学においては，大学院の教育研究を充実することが必要になります。東北大学農学部では，これまで以上に大学院における教育研究を充実し，拡充するために組織改編を平成９年度から部分的に開始する予定です。いわゆる大学院重点化です。これが完了となるとき，農学研究科の教育研究の四本柱は，生物生産科学，生命科学，環境科学，社会科学となります。この点でも，本年は，農学部の歴史的転換期にあたります。

農学部に在籍する留学生の皆さんは，それぞれの専門分野で知識を深めるばかりでなく，国際交流の大切な担い手でもあります。国際交流の第一歩はお互いの国を訪れてその国の人々に接し，お互いの国の歴史や文化を語り会うことから始まります。それが国際理解につながっていきます。できれば，専門分野の研究を深めるだけでなく，日本の文化に親しんでいただくと同時に，それぞれの国の歴史や文化を互いに知り合い，そして理解を深めることに努力していただければ幸いです。

国際交流のさらなる飛躍のために

農学部国際交流委員会委員長
三　枝　正　彦

東北大学農学部は本年度，創立50周年を迎え，国内での活動はもとより世界の東北大農学部としての活躍が期待されております。現在，本学部は韓国済州大学校農科大学，タイ国カセサート大学理学部および農学部，ハンガリー国園芸・食品工科大学およびスペイン国ビゴ大学理学部との間に学術交流協定を締結しております。また学内には18カ国46名もの外国人留学生が学んでおり，国際交流活動がますます盛んになっております。このような情勢の中でこのたび農学部においても独自の国際交流ニュースが創刊されますことは大変大きな歓びであります。農学部国際交流委員会では学術交流協定校との交流を始め，留学生のためのオリエンテーションおよび懇談会，附属施設見学会，各種奨学生の推薦などを行っておりますが，外国人留学生や研究者の集いでしばしば耳にするのは，学内や学部内の情報が充分理解できないとのことであります。現在のところ情報の多くは，たとえ留学生対象でも漢字を含む日本語で行われているのが現状です。したがって，留学生は口伝えで情報を集め，またチューターや指導教官に翻訳して戴きながら不安な研究生活や日常生活を送っております。今後この国際交流ニュースを通じて，少しでも外国人研究者や留学生の不安が解消され，また一方では農学部の学生や教職員の皆様が彼らの考え方や生活を理解して戴ければ幸いです。この国際交流ニュースのあり方についてはまだ充分煮詰めておりませんが，学術交流協定校との交流，外国人研究者や留学生の紹介，お互いの異文化や留学体験談の紹介，学内や学部の年間行事やイベントの紹介，研究施設や設備，最新の研究成果の解説，研究生活や日常生活に役立つ情報交換など多方面の利用が考えられます。国際交流のさらなる飛躍のために農学部構成員の皆様の積極的な寄稿を期待しております。

ニューフェース紹介

農学部には現在50名弱の留学生が在籍しています。ここでは，去年秋以降，新しく農学部に入学した留学生を紹介します。

事　項

1. 国籍・年齢
2. 身分
3. 研究テーマ
4. 出身学校
5. 入学年月
6. 趣味・特技
7. 自己紹介

JIN　DONG　HAO
金　東　浩

1. 中国・26才
2. 農学部研究生
3. バイオリアクターを用いた大豆蛋白質の有効利用
4. 延辺農学院
5. 平成８年５月
6. 音楽
7. 一所懸命頑張って（人間的に）大きくなりたいと思います。それが私を愛する人々・お世話になった人々に差し上げる最高のおみやげとなれば，これほどすばらしいことはありません。

教官の外国出張

（平成７年度）

平成７年度における教官等の外国出張，海外研修等は延べ68人であり，出張先はアメリカ（19名）を始め，イギリス（８名），中国（７名），ドイツ（６名），フィリピン，オランダ（各５名），オーストリア（４名），フランス，イタリア，タイ，韓国（各３名），インド，スペイン，（各２名），ロシア，トルコ，マレーシア，アルゼンチン，インドネシア，オーストラリア，台湾，ジンバブエ，マラウイ，カナダ，チリ，ブラジル（各１名）の25カ国に及んでいる。

（なお，出張先については１人で数カ国に及ぶ場合がある。）

学術交流協定締結大学との交流

（平成７・８年度）

韓国，済州大学

Ｈ８　日本語研修プログラムの設定（済州大学側の都合で最終的にはキャンセル）

タイ国　カセサート大学

Ｈ７　神尾好是教授，理学部を共同研究で訪問

Ｈ８　三枝正彦教授，国際学会で農学部を表敬訪問

ハンガリー国，園芸・食品工科大学

Ｈ７　同大学ポイス教授が共同研究で来校し，学部長を表敬訪問

Ｈ７　同大学よりアッティラ，オンボディを博士課程後期へ受入れ

スペイン国，ビゴ大学

Ｈ８　理学部と学術交流協定を締結

Ｈ８　安元　健教授，共同研究で同大学を訪問

農学部における外国人留学生

（平成８年４月現在）

平成８年度の本学部における外国人留学生は18ケ国46人（内女子16名）である。これを国別に見ると，アジア地域の留学生が34名（全体の74％）と大半を占め、中でも中国12名（26％）、韓国７名（15％）と多い。このほかの国と留学生数は次の通りである。インドネシア４名，マレーシア，ガーナ各３名，台湾，バングラディシュ，ベトナム，ブラジル各２名，イラン，アルバニア，チリ，ロシア，ハンガリー，パキスタン，エジプト，タイ，ウズベキスタン各１名である。

農場見学の実施

農学部では毎年，留学生を対象に附属施設の見学旅行を実施しています。今年度は，川渡にある附属農場の見学を平成８年10月30日に行いました。ちょうど紅葉の季節でもあり，農場近くの鳴子峡にも足を伸ばしました。以下は参加者の感想です。

史　清　文

今日は忘れられない日になりました。私は農学部の留学生と先生と一緒に附属農場へ見学に行きました。最初に，農場の三枝教授が私たちに農場の概況を紹介してくれたあとに，私たちを連れていろいろなところを参観しました。そのおかげで私は農場の様子が良くわかりました。

正午，私たちはジンギスカンと新鮮な牛乳で招待されました。はじめて畳に座って日本的にご飯を食べました。

帰りに私たちは鳴子峡にも足を伸ばしました。紅葉している景色は人をうっとりさせるもので，私は恋恋として帰るに忍びないと思いました。

午後５時頃に農学部に戻り，無事見学が終りました。私が日本に来てから初めての旅行でした。日本の空気も緑もとてもきれいです。こういう見学旅行は大変面白いので，また行きたいと思います。

張　一　震

この度，農学部附属農場を見学させていただき，非常に楽しくいろいろ経験出来ました。そちらに参る前には，私は農場の様子が具体的に想像できなくて，農場が小さくて，ただの農村かなあと思っておりました。しかし実際には，東北大学の94％の面積を占める広大な土地の上に作物，畑，そして牧場が果てしなく広がっておりました。それからいろいろ大型農業，畜牧機械が全部備えられ，まさに大型の農牧業センターでありました。

オンボディ　アティラ

最初に，三枝先生が30分間くらい農場のことについて話しました。それから農場に行って，はじめに牛を見ました。それから土壌の模式断面の所に行って川渡の土を見ました。先生はそこで，農場でのいろいろな試験について説明しました。

12時からお昼ごはんを食べました。農場産の牛乳を飲んでジンギスカンを食べました。これは本当においしくて，コンパはとても楽しかったです。

１時に農場を出て，鳴子峡に行きました。鳴子峡で１時間歩きました。その日は紅葉の盛りで，すごくきれいでした。だから皆さんはたくさん写真を撮っていました。

昼食にジンギスカンを食べさせていただき，おいしかったです。

また，農場の北に位置する鳴子町は豊かな自然の恵みの宝庫であるため，紅葉は大変美しいものでありました。私の心に深い感動を与えてくれました。一度ここにくらしたいと思っております。

留学生 オリエンテーション開催

昨年12月18日に留学生オリエンテーションを開催しました。内容は今年度で学位を取得し，帰国される作物学講座Ｄ３のジュリアルニさんと，海外留学から４月に帰国されたばかりの北澤先生（動物資源化学講座）の特別講演でした。オリエンテーション終了後，指導教官，日本人チューターと一緒に懇親会を開催しました。以下は特別講演の要旨です。

『ありがとう』・・・・・・

ジュリアルニ

今月の２日に先生から話があって，外国人留学生オリエンテーションに講演を頼まれました。私の留学期間が来年の３月までということもあり，私の思い出作りにもしたいと考えてこの講演を受け取りました。

私は日本に来てから５年間になりました。来た時には日本語をあまり話せませんでした。日本語を話せないまま，この大学で勉強できるかどうかすごく不安でした。私の場合は特別日本語クラスがないため，自分で日本語を勉強しなければなりません。日本に来てから３ヶ月もたち，修士課程に入りました。日本語を話せないまま，勉強することが難しいと思うので，日本語クラスを通い始めました。しかし，日中で実験と講義だけで時間が取られたので，日本語の勉強はできませんでした。どうすれば日本語の勉強ができるのかずいぶん考えました。通った日本語クラスの先生から日本語を教えて下さるボランティアの先生を紹介され，すごく助かりました。それから毎週２回，夕方から日本語を勉強することになりました。あのボランティアの先生のおかげで少しずつ日本語を話せるようになり，心から感謝致します。

日本で勉強している留学生は，特に院生の学生は日本語をマスターした方が良いと思います。私は大学にいる時にできるだけなんでも日本語で話したいと思いました。これも日本語の練習にもなります。研究室の皆さんは私に優しい日本語で話してくれました。今までも，もし読めない漢字があったり，意味が分からない言葉があれば優しく説明してくれます。フレンドリーな人たちに恵まれてうれしく思います。留学生は日本語を話せるようになるのは留学生自身の努力もあるし，日本人の皆さんの協力も必要だと考えています。

私の勉強の生活に関しては日本人の学生と変わらない，忙しい毎日です。その忙しさの中にいろいろなことも経験してきました。それも良い思い出になりました。５年間も研究をしていろいろな難しさを感じて，悩んだりして，自分は自分なりに大きく成長したと思います。最後に，研究室の皆さんと農学部の皆さんの協力を深く感謝します。ありがとうございました。

留学生体験記

留学してHAPPYになれる！

東北大学農学部助手　北　澤　春　樹

私は，1994年度日本学術振興会海外特別研究員に採用され，1994年10月１日から1996年４月12日までの約１年６カ月間，アメリカ合衆国国立癌研究所（National Cancer Institute ; NCI）に留学しました。ＮＣＩは，世界の研究の中心的研究機関である国立保健研究所（National Institute of Health ; NIH）に属しております。そこでは，ノーベル賞候補者をはじめ世界をリードする著名な研究者がひしめき合い，日々激しい研究バトルを繰り広げておりました。私はＮＣＩのブラ

ンチであるフレデリック癌研究所（NCI-Frederick Cancer Research Development Center；NCI-FCRDC）（ダスティン・ホフマン主演映画「アウトブレイク」の舞台でもある米軍キャンプの中にある研究所)の，分子免疫調節学研究部門（Laboratory of Molecular Immunoregulation；LMI）に所属し，サイトカイン研究の世界的権威である，Joost J. Oppenheim博士およびScott K. Durum博士のもとで，T細胞ホーミングのサイトカイン支配に関する研究を行いました。

フレデリックはワシントンＤＣより50Km程北に位置するメリーランド州の片田舎で，危険な国No.1の名を持つアメリカからは，想像もつかないくらい治安のよい街でした。危険地帯を把握し，夜中は出歩かないなどのルールを守りさえすれば，快適な生活を送れることを身を持って体験しました。週末になると，家族（妻，娘２人）４人で，ワシントンのモールに出かけ，国会議事堂やホワイトハウスを眺めながら，美術館，宇宙博物館や自然博物館などを巡り，楽しい時を過ごしました。博物館は，全て入場無料であり，写真撮影可である上，フレデリックから高速道路で１時間弱と近いこともあって，毎週のように足を運びました。子供たちは，ワシントンモニュメントに届けとばかり，モール内の大きな公園で凧上げをしたことを時々思い出し，日本の狭さをしみじみ感じているようです。

アメリカ社会で，一番印象に残った事は，研究のみならず，「自分の事は自分で責任を持ってやる」という考えでした。つまり，不満があれば主張するのはあたりまえで，言わないもの負けという訳です。私は，留学生活が始まって数カ月は，それになかなか馴染ませんでした。語学力不足も，研究のディスカッション中にとぼける時の武器にはなっても，各種保険の契約，税金の手続き，子供の学校関係，あるいはアパートにおける苦情の訴えなどの主張には，逆効果であり，欲求不満がつのるばかりでした。半年後の，生活に慣れ始めたころになると，次第にアメリカ的考え方を受け入れるようになり（これが結構慣れると，言いたいことを言える雰囲気なので，物事を楽観視できるようになる），生活に余裕が持てるようになりました。

私は，もともと全ての行動は，「いかなる時でも家族一緒」をモットーとしていますので，できるだけ家族がアメリカ生活をエンジョイできるよう努めました。夏には，サンフランシスコでの国際学会を機に，ロサンゼルスのハリウッドやディズニーランド，ラスベガスを通って，グランドキャニオン，さらに北上して，グランドティートン，イエローストーンを巡る１カ月間の大旅行を決行しました。両親を呼んでの，ニューヨークやカナダナイアガラの滝も格別なものでした。冬に行ったフロリダディズニーワールドは，子供たちにも感動がその余韻として心に残っていることでしょう。

私のアメリカ留学では，世界をリードする研究における刺激を大いに受け，今後の研究に対する意欲が湧いたという点で，当初の目的は達成されたと思います。しかしながら，それ以上に，家族と共に苦労し，夢中で体験したアメリカ生活が強烈な印象として残り，これからの我々の人生の中で強い見方となる事を確信し得た事が大きな収穫だったと思います。

異国の地で，慣れない生活の中には，“必ず何かが起こり（Happening），驚きや感動があり（Amazing），心身共に傷つく（Painfulness）こともあるが，二度と味わえない喜び（Pleasure）が待っている。そして全ては自分自身が根底にある（Yourself）ということを忘れてはいけない。そうすれば，家族共々幸せ（HAPPY）になれる”ということを学んだような気がします。私の勝手な思い込みかもしれませんが，私の体験が，現在留学をされて日本におられる方々，あるいはこれから留学をされようとしている方々の心の支えの一助になれば幸いに思います。二度とない貴重な体験を思う存分エンジョイしてみてはいかがでしょうか！